## 自治労京都本部"ボーン・ポォンの会" カンボジア 訪問記



木村幹雄

今年の3月4日から5泊6日で、"ボーンポ ォンの会"の一員として、前自治総研理事長の 三村さんらとカンボジアを訪問する機会を得た。 「ボーン・ポォン」とは、クメール語で「親 戚・兄弟」を意味するそうで、今までカンボジ アのことについて不勉強だった自分にすれば、 とてもそんな親しい気持ちではなく、少し気恥 ずかしさを持って参加した。

"ボーンポォンの会"は、2002年に、自治労 京都府本部の組合員を中心に結成した。これま で「カンボジア子供の家」への支援を軸として、 カンボジアの子供たちへ絵本を送る活動や、幼 稚園の教員を養成するための奨学金支援に取り 組み、今回は第3次の訪問団である。

# 3月4日(土) いよいよ出発、カンボシア・シムリアップへ

午前9時、関空集合。タイ航空でタイ、バン コク国際空港を経由して、遺跡で有名なカンボ ジア、シムリアップへ。順調な滑り出しと言い たいところだが、集合時間から大幅に遅れる参 加者があったりして、先が思いやられるスター トとなったが、なんとか13名そろって無事出発。 バンコクからシムリアップへの飛行中、雲の 切れ間から地上を眺めると、村どころか人家ら

しきものも一切見えず、ただただジャングルが 続いているだけの景色だった。シムリアップへ 到着したのはすでに夕方。とにかく暑く、街に は北朝鮮国営のナイトクラブがあったり、観光 地らしくなかなか活気にあふれていた。初日の 夕食にカンボジア料理を食べたレストランには、 ブーゲンビリアが咲き乱れ、南国をアピール。 レストランの前の川べりは、現地若者のデート スポット。夜9時以降は立ち入りを禁止されて いるが、警官に何がしかを渡すと大目に見ても らえるそうだ。賄賂や特権階級といった話は、 この短い旅行中に何度か聞くこととなった。

ホテルは街の中心地にあり、窓を開けると夜 遅くまでカラオケの大きな声が聞こえていた。 心配していた給湯やエアコンなどの設備面は、 充分に国際基準を満たしており、快適な眠りを 得ることができた。



飛行機でシムリアップへ

#### 2 3月5日(日) ジャングルでアンコール文明に出会った

今日は日曜日。公式行事もなく、朝からよく 晴れて厳しい暑さの中、世界遺産に登録されて いるアンコールワットなどへ見学に出発。遺跡 群は、シムリアップの街からさほど遠くないた め、自転車ツアーや東南アジアらしいゾウに乗 っての観光なども、楽しむことができるようだ。

まずは、12世紀に造られたクメール王朝の古都で、周りを囲む堀の総延長が12キロに及ぶ、広大なアンコールトムを訪問。入り口では7つの顔を持つ、コブラの蛇神ナーガを引く阿修羅たちが出迎えてくれた。遺跡の中には壁に彫られた仏の微笑が満ち、中心にあるバイヨン寺院では、塔の上からかすかに微笑を浮かべた巨大な菩薩の顔に囲まれる。

隣にあるタ・プローム寺院は、発見当時のまま残されていた。巨大に成長したガジュマルが、まさに寺院を飲み込もうとしており、人間の営みや文明が、自然に裁かれる場所であった。

気分は遺跡観光で高揚しているが、さすがの 暑さに肉体は参り、市内に戻ってクーラーの効 いたレストランで昼食。それから、一旦ホテル に戻り2時間の昼寝休憩をとった。

午後からは、カンボジア観光のハイライト、アンコールワットを見学。ユネスコを中心に、日本をはじめ世界各国から保護の手が差し伸べられており、徐々にではあるが、昔のクメール文化の輝きを取り戻している。ここでも蛇神ナーガ、レリーフの仏が出迎えてくれた。厳しい暑さの中、徒歩でやっとたどり着いた中央祠堂では、壁のような階段を見て少しひるむが、気を取り直して最上段へアタック。しかしステップ幅が狭く、足を横にして登らないと踏ん張れない。「後悔、先に立たず」で、引き返すのはさらに怖いので、恐る恐る一歩ずつゆっくり







アンコールトムにて

と登る。上に立つとさすが見晴らしがよく、周 りにうっそうたるジャングルが続いているのが よくわかる。降りるときは、手すりのある石段 が1カ所しかなく、長蛇の列ができていた。と ても手すりのないところを降りる勇気はなく、 辛抱強く列に並んで降ることとなった。

夕刻、アンコールワットを後に、夕日が綺麗 なプノンバケンへ行った。少し曇っていたため、 見晴らしが悪いことを口実に早めに切り上げ、 土産物屋を冷やかしに。子供の売り子から、ワ

ンダラー(1\$)の土産を値切って自治労の土 産にする。

夜、現地のボランティア団体シャンティのス タッフと合流し、レストランの庭でカンボジア 古典舞踊を見ながら夕食。屋外での蒸し暑さに 少し閉口した。冷房代わりに時たま頭上から霧 が食事の上に降りかかる。どんな水か判らず、 かえって気色悪かった。東南アジア独特の香辛 料のきいた料理かと心配したが、私たちの口に 合った美味しい料理がテーブルに並んだ。

#### 3月6日(月) 郵便も着かない村で子供たちと

いよいよ今日から本来の活動開始。まずはタ イ国境に向かう途中にあるバンテイミンチェイ 州での小学校訪問のため、タイへ続く未舗装の 国道を、バスに3時間あまり揺られて向かう。

数年前までは、このあたりも地雷原が続き、 こうして通れるようになったのは最近とのこと だった。道中、バスの車窓からは、広々とした のどかな農村風景が続いていたが、農閑期のせ いか、地雷原のせいか、農作業をしている人が あまりいなかった。

午前中はプレアネットプレア郡スラ・レッチ 小学校、午後からはプノンスロ郡チェイオドン 小学校を訪問。持ってきた文房具の寄贈を行い、 校庭でのシャンティのスタッフによる絵本の読 み聞かせを見学。また、訪問団のメンバーが日 本の小学生が書いた絵を持参して、文化交流も 行った。子供たちには訪問団からドッジボール をプレゼント。私は木陰で見学していたが、炎 天下で子供たちと団員とのドッジボールの交流 試合を行った。

特に、スラ・レッチ小学校では大きな歓声に 学校に通えない近くの子供が集まり、校舎の影 からうらやましそうに見ていたり、チェイオド ン小学校ではぬり絵などの教材を独自で作るた



日本の小学生の絵を紹介



プレゼントしたドッジボールで交流試合

めに、昔懐かしい謄写版印刷機が現役で活躍し ていたのが印象的だった。

この日の活動を終えて、炎天下でヘロヘロに なりながら、クーラーの聞いたバスに乗り込み、 またしても悪路を3時間揺られてシムリアップ へ。市内には日が沈んでから帰着。予定してい た古典舞踊は見られなかったが、蒸し暑い庭を 避けて、クーラーの効いた室内でゆっくりとカ ンボジア料理を中心としたバイキング形式のタ 食をとった。活動初日の心地よい疲労から、シ ムリアップ最後の夜を爆睡した。

### 3月7日(火) 200のクメールの微笑みに出会った

今日は、訪問の主目的であるプノンペン市内 にある、自治労が建てた「アジア子供の家」と、 府本部も支援する「教員養成学校」を訪問。早 朝に朝食を済ませ、またしてもあのプロペラ機

でプノンペンへ飛び立った。

空港から大使館も並ぶプノンペン市内へ。静 観な地区と思われるところにある「カンボジア 子供の家」と「教員養成学校」に到着すると、 校庭にはボディーに「自治労京都府本部」と書 かれたワンボックスカーが停まっていた。これ は府本部が結成50周年記念事業として2000年9 月に贈呈した車(当時すでに中古車)で、今も 元気に活躍しているのを見て感激した。

ソリダー校長らから施設運営の概要などの説明を聞いたあと、施設見学。「子供の家」では、ボロボロになるまで使われているドラえもんのぬいぐるみで子供が遊び、「養成学校」の宿舎では、部屋いっぱいに2段ベッドを5台入れて10代の若い女生徒が共同生活をしていた。

昼食は、学生食堂で同じメニューを学生と一緒に食べた。ランチといっても一汁のみ。フキのような野菜と魚を一緒に煮込んだスープを、ご飯にかけて食べるいたってシンプルなもので、思わずテレビ番組の「うるるん滞在記」に出演しているような気がした。デザートには、カンボジア饅頭みたいなのを出してもらい、心づくしの歓迎を受けた。食事の後はビンゴゲーム。日本から持ってきた文房具などの景品を獲得するため、大いに盛り上がった。

午後からは、文部省の局長を招いて学校で行われる「国際女性デー」の式典に参加する班と、 プノンペン市内の視察やツールスレン・ペン婦 人の丘を見学する班に分かれた。

式典は、ピアニカの伴奏で200人ほどの生徒が国歌を斉唱するといった、まさに「清貧」という言葉が当てはまるような雰囲気で、文部省局長の格調高い祝辞や、男性から女性に花束贈呈が行われた。私も贈呈する側に参加させていただいた。カンボジアでは「国際女性デー」が祝日となっていることに、少しこの国の将来に期待が持てる気がした。

夜は、また全員が合流。「養成学校」校庭で



2000年に「子供の家」に寄贈したワゴン車



「教員養成学校」で野外パーティー

「女性デー」を祝う野外パーティーに参加した。 今度は、学生と一緒においしい食事をいただき、 民族ダンスにも参加して、蒸し暑いプノンペン の夕暮れに楽しいひと時を過ごした。

ホテルに帰ったあと、夜食を食べに皆で街へ出かけた。クーラーの効いているレストランを探し出し、あとで後悔することになった、肉や野菜など自分の好きな具材を注文するカンボジア風しゃぶしゃぶを食べた。満腹感と今日一日の充実感で、ホテルでは深い眠りに落ちた。

#### 5 3月8日(水) 語る言葉もない子供たちに出会った

いよいよカンボジア最後の日。この蒸し暑さとも今日が最後と自分を奮い立たせ、JLMM (カトリック信徒宣教者会)の案内で、プノンペン郊外にあるゴミの山と、そこに形成されているスラムを訪問。JLMMは、そこのスラムで生活している子供たちに勉強を教えたり、ボ

ランティア活動をしている団体である。

道中、汚水の臭いがバスの中にまで漂ってき たので、何があるのかと窓の外を見ると、一面 にクーシンサイ畑が広がっていた。クーシンサ イはこの汚水で栽培されているそうで、クレソ ンによく似ている。そういえば、昨夜のしゃぶ しゃぶに入れ、ムシャムシャと食べたことを思 い出したが、後の祭り。しばらくは中国野菜を 口にせずにおこうと固く誓った。

現地のスラムやゴミの山は、想像以上で、人 権以前の状態ではないかと思う。子供ははだし で遊びまわり、怪我をして破傷風に罹ると、た だ死ぬのを待つだけといった、生存権すらない 保障されていない惨状だ。ゴミの山は、焼却施 設がないために、市内で出されるゴミが廃棄さ れている場所。すでに10メートルほどの高さに なっていて、そこへダンプに詰まれたゴミがひ っきりなしに運び込まれていた。私たちは、耐 えられそうにない埃と臭いのためマスクをして の視察したが、はだしもまじる多くの子どもた ちは、ゴミが廃棄された途端に駆け寄り、中か ら売れるものをより出す光景が繰り広げられた。

JLMMの事務所に戻ってから、泥のついた 靴を洗い、事務所スタッフに日本からの文房具 を手渡して、カンボジアにおける公式行事をす べて終了した。

午後からは、ホテルで午睡のあと出発までの 間、市内見物に行った。ロシアンマーケットや、 街の中心にあるセントラルマーケットで、買い 物タイムを持ったが、とてもお土産になるよう なものは見つからなかった。どちらのマーケッ トも、クーラーなどは当然なく、相変わらず暑 さだけが身体を攻め立てる。中国製のキーホル ダーや、子供への土産にと1ドルのTシャツな どをしょぼく購入し、せっかくの自由時間を空 振りしたような気持ちで、バスに引き上げた。

深夜、プノンペン空港からバンコクを経由し、 朝7時に関西国際空港へ無事、到着した。



ごみの山で



プノンペン市街

#### 帰国して

確かにカンボジアはインフラ整備もまだまだ だ。バンテイミンチェイ州などでは郵便制度も なく、日本からは手紙すら送れない。バイクや 自動車の免許制度や登録制度はなく、小学生が 運転しているという、私たちの当たり前が通用 しない国家だ。特に、「特権階級」や「賄賂」 といった言葉を、訪問中よく耳にして哀しい気 持ちになった。

支援を行ってきた教員養成学校で学ぶ育ち盛 りの生徒が、月15ドルの生活費で、1日2食、 しかも貧しい食事で頑張っている姿は、大いに 訪問団のメンバー自身学ぶところがあったので はないか。何かとサプライズの連続のカンボジ ア訪問だったが、新しく誕生した国を実際に目 で見ることなどめったにできるものではなく、 カンボジアが今後、どのように育って行くのか、 興味を持って注目していきたいと感じた。

(きむら みきお・自治労京都府本部執行委員長)